多気遺跡群発掘調査報告Ⅳ

松月院跡・伝本願寺跡

１９９７年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

伊勢の国になかでも山間部に位置します美杉村には、数多くの秘められた文化財が眠っているといわれています。そのなかでも、上多気・下多気地区には著名な「北畠氏館跡庭園」があり、全国から観光客が訪れていると聞いています。

この上多気・下多気は、かつては2地区を含めて「多気」と呼ばれた地域で、南北朝時代から戦国時代にかけての大名・北畠氏が本拠地を置いたところであります。北畠氏は中・南伊勢を中心に、南伊賀・志摩および東紀伊の一部、さらには大和宇陀地域までをも影響を及ぼした大名であります。そのような点からすれば、当地は北畠氏影響地域における中心地であったわけで、その歴史的価値は極めて高いものといえましょう。

多気では、いくつかの北畠氏時代の遺跡を見ることができます。これまでは開発も少なく、落ち着いたたたずまいを存分に残していたのですが、国道368号線の整備が進み、当地にも次第に開発の波が押し寄せようとしています。そのような動きともに、この多気の地の歴史的な重要性が次第に理解されつつあり、今年度は文化庁の補助を得て、重要遺跡確認調査が実施されましたことは非常に喜ばしいことであります。

今回発掘調査しました場所は、国道422号線の改修にかかるものであります。とくに、今回その一部を発掘調査しました松月院跡は、数多い多気の遺跡のなかでも白眉ともいえる壮大な石垣を残しているところでありました。幸い、貴重な石垣は工事によって破壊されることなく残るため、三重県埋蔵文化財センターとしても、その重要性から、石垣の実測図と現地の地形図を作成いたしたところであります。発掘調査の成果とともに、この図面が今後の多気を考えていくうえでの資料となりますことを期待します。

調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、美杉町役場、美杉村教育委員会、県土木部・久居土木事務所から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

１９９７年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長　奥村敏夫

例　　言

1　本書は、三重県一志郡美杉村上多気・下多気に所在する多気遺跡群（多気北畠氏遺跡）のうち、上多気字小津地内に所在する松月院跡・伝本願寺跡の発掘調査報告書である。

2　この発掘調査は、平成８年度国道422号線県単道路改良工事に伴い実施したものである。

3　調査は平成８年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

主幹兼調査第一課長　吉水康夫

第二係長　杉谷政樹

技　　師　伊藤裕偉

4　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。遺構・遺物の写真、執筆及び全体の編集は、伊藤裕偉が行った。

5　調査にあたっては、美杉村在住の各位、美杉村教育委員会、および県土木部道路建設課・久居土木事務所から多大な協力を受けたことを明記する。

6　報告書作成にあたっては、千田嘉博氏（国立歴史民俗博物館）のご教示を得た。

7　挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏６°20′（昭和62年）である。

8　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

9　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき‥‥‥‥‥「坏」があるが、「杯」を用いた。

わん‥‥‥‥‥「椀」「碗」「埦」があるが、「椀」を用いた。

10　当報告書での遺構は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けた。

ＳＤ‥‥溝　　ＳＫ‥‥土坑・石組　　ＳＺ‥‥落ち込み・石列

pit‥‥ピット、柱穴

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言……(1)
　1　調査の契機……(1)
　2　調査の経過……(1)
　3　調査の方法……(2)
Ⅱ　位置と環境……(3)
　1　地形と機能……(3)
　2　松月院跡について……(3)
Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～……(7)
　1　調査区の地形と基本層位……(7)
　2　検出した遺構……(7)
Ⅳ　調査の成果～出土遺物～……(12)
　1　松月院跡の遺物……(12)
　2　伝本願寺跡の遺物……(12)
　3　松月院跡の中世石造物……(12)
Ⅴ　調査のまとめと課題……(14)
　1　松月院跡について……(14)
　2　伝本願寺跡について……(14)

図　版　目　次

ＰＬ．１　松月院跡調査区(1)
ＰＬ．２　松月院跡調査区(2)
ＰＬ．３　松月院跡調査区(3)
ＰＬ．４　伝本願寺跡調査区(1)
ＰＬ．５　伝本願寺跡調査区(2)
ＰＬ．６　伝本願寺跡調査区(3)
ＰＬ．７　伝本願寺跡調査区(4)
ＰＬ．８　松月院跡(1)
ＰＬ．９　松月院跡(2)
ＰＬ．10　松月院跡(3)
ＰＬ．11　松月院跡(4)
ＰＬ．12　松月院跡(5)
ＰＬ．13　松月院跡(6)
ＰＬ．14　松月院跡(7)

挿　図　目　次

fig. 1　多気周辺地形図
fig. 2　遺跡周辺地形図
fig. 3　調査区周辺地形図
fig. 4　松月院跡と調査区の位置
fig. 5　松月院跡調査区平面・土層断面図
fig. 6　伝本願寺跡調査区平面・土層断面図
fig. 7　石列ＳＺ11平面・立面図
fig. 8　石組ＳＫ10平面・立面図
fig. 9　出土遺物ほか実測図

付　　図

付図１　松月院跡平面図
付図２　松月院跡本堂跡東石垣実測図
付図３　松月院跡外郭石垣実測図

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機

国道422 号線は、飯南町から名張市を経て上野市へと至る道である。美杉村地内では、かつての「伊勢本街道」にあたる国道368 号線と上多気の地で交差する。美杉村地内での国道422 号線とは、かつての「庄司峠越え」に相当する部分である。

この道路改良事業は、三重県内でも特に山間部といえるこの美杉村内のうち、丹生俣地内と上多気地内とを結ぶ幹線道に相当し、狭隘な道路であったため、早急な整備が必要とされてきたものである。

美杉村内に包蔵されている各種の重要な埋蔵文化財のうち、特に字上多気・下多気の存在する「多気」は、かつて伊勢から伊賀・大和の一部を領有していた大名・北畠氏が本拠地としていたところであり、県内でも有数の歴史的重要地域として大方の理解を得ている。今回発掘調査を行ったところも、その一部と理解される場所である。

松月院跡については、事業地の東隣に本堂跡の石積が認められるため、試掘調査の必要はなく、即本調査とした。伝本願寺跡については、平成７年度に行った試掘調査の結果を基にした。

2　調査の経過

a　調査の経過

松月院跡・伝本願寺跡（第２次）の発掘調査は、平成８年８月29日から開始し、同年10月16日に終了した。最終的な調査面積は、松月院跡で320㎡、伝本願寺跡で290㎡であった。

調査に際しては、以下の方々の御参加があった。ここにお名前を記して感謝の意を表したい。

（現地調査作業員）

小林久生、芝山元次、芝山佳子、鈴木コウ、鈴木裕子、鈴木由起子、田中時枝、田中久一、辻　こま、辻　鈴代、辻村良和、中川房代、西井　香、平尾光生、深田登美子、三浦久弥、矢下ゆきゑ、山本あきゑ、結城　実、

b　調査日誌（抄）

８月29日　松月院跡の調査前測量（越賀弘幸・伊藤）。

９月２日　道具搬入。

９月３日　松月院跡の掘削作業開始。遺物微量。

９月４日　伝本願寺跡の重機掘削開始。

９月６日　松月院跡で、本堂跡石積と方位を合わせた溝を検出。期待高まる。

９月10日　松月院跡で、13世紀代の青磁出土。はじめてまともな遺物。

９月11日　松月院跡、土坑・ピットの掘削。伝本願寺跡の地区設定（石淵誠人）。

９月12日　松月院跡で、チャート片出土。

９月18日　松月院跡、ＳＤ１は近代以降と判明。

９月19日　松月院跡、ピットは近世のものと判明。

９月24日　松月院跡、清掃。

９月27日　伝本願寺跡、掘削開始。平安後期頃の甕出土。松月院跡調査区よりはましか。

10月２日　伝本願寺跡、ＳＫ８掘削。

10月４日　伝本願寺跡、ＳＫ10で石組を確認。

10月７日　ＳＫ８から、近代の遺物出土。

10月９日　伝本願寺跡、石列を確認。ＳＫ８・10の実測図作成。

10月15日　伝本願寺跡、北宋銭出土。まともな遺物があった。清掃。松月院跡の調査後測量。本日にて掘削作業終了。

10月16日　伝本願寺跡の実測（伊藤）。全ての作業が終了。

c　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下「法」）に等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに通知している。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）

平成８年８月１日付け道建第1131 号（県知事通知）

・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）

平成８年７月29日付け教文第1724号（県教育長通知）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）

平成９年１月13日付け教文第6－7号（県教育長通知）

3　調査の方法

a　掘削について

松月院跡については、植林地であり、下部遺構を痛めるおそれがあったため、全て人力による掘削とした。伝本願寺跡については、重機により表土を除去した後、人力掘削を行った。

b　小地区設定について

今回の調査は、松月院跡と伝本願寺跡の調査区それぞれ別に小地区設定を行った。小地区は、４ｍ四方のグリットで、南北方向に数字を、東西方向にアルファベットを付加した。そして、北西隅の番号をそのグリット名とした。

c　遺構図面について

調査区全体の平面図は1／100の平板測量による。個々の遺構については、1／10の実測図を作成したものもある

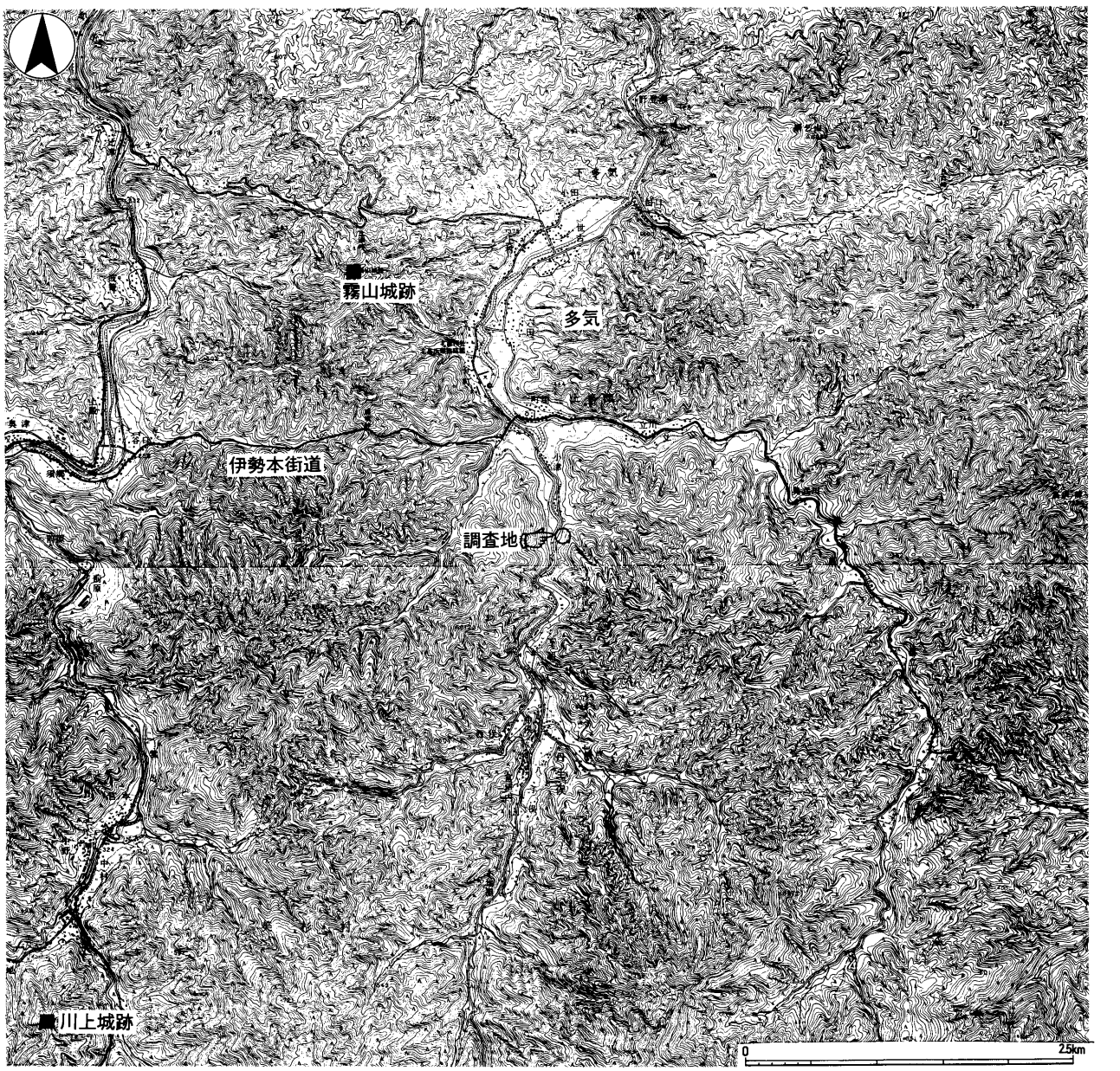


fig. 1　　多気周辺地形図（１：50,000）　（国土地理院　１／25,000「伊勢奥津」「宮前」から引用）

Ⅱ　位置と環境

1　地形と機能

今回の調査地は、行政的には一志郡美杉村上多気字小津である。この上多気は八手俣川水系によって形成された谷の上流部に相当し、下流部には下多気がある。上多気・下多気は、近世・近代には行政的にはそれぞれが別の村としてあった。しかし、この２地区は地形的に連続し、この２地区で一定のエリアを形成していることは明白である。したがって、上多気・下多気を総称して「多気」の名称を用いることとする。

多気は、八手俣川水系によって形成された盆地状を呈する谷で、平地部の標高は約330～340mである。八手俣川水系は、丹生俣地区から流れる八手俣川本流と、立川地区方面から流れる支流の立川川とがあるが、今回の調査地は立川川と合流する手前の、標高約346 mの右岸段丘上に位置する。

多気の歴史的環境については、平成４年度の報告書[1] でほとんど触れているので、ここでは繰り返さない。要点としては、A；中世における北畠氏の拠点として機能していたこと、B；その期間は14世紀中葉頃から16世紀後葉頃に至る、いわゆる守護・戦国大名クラスの拠点としては全国的に見ても長期にわたること、C；北畠氏時代に多様な拠点整備がなされたこと、である。

2　松月院について

伝本願寺跡については、『多気遺跡群発掘調査報告』Ⅲ（三重県埋蔵文化財センター　1996）で触れているのでここでは繰り返さず、松月院跡についてのみ述べる。以下、松月院跡の現況を見る。

位置と地形

多気の最奥部近くに位置する。西に派生する尾根を利用し、主に削平によって平坦地を形成しているものと考えられる。

本堂跡と石垣

中央に最も大きい平坦地があり、面積は約1,800㎡ある。この部分が「本堂跡」とされている（以下、「本堂跡」とする）。標高は、本堂跡中央部で約349.2mである。

本堂跡の西および南には、石組が認められる。この石組は、現在は基底部のみが観察できるが、長さ１m以上にもなる大石を用いるものである。

本堂跡を区画する西側の石組は、ほぼ真北方向となっている。おそらく、方位もかなり意識して造成されていると考えられる。

本堂の東側、すなわち尾根を切断した部分にも石垣が見られる。今は、西面する部分が明確に観察されるが、その南北端で屈曲が見られることから、本堂跡東の斜面部には、その裾が埋まっているものと推察される。

西面部は、現在見える範囲で高さ約３m、長さ約8.2mで、肉眼観察ではほとんど反りが認められず、約80°という急峻な角度で積まれている。使用されている石材はこの付近から産出する自然石で、人為的な加工痕は見られないことから、割石ではなく、河原石であると考えられる。

本堂跡東のテラス

本堂跡東の石垣の上には、不定形な平坦地がある。本堂跡東端から約4.5m高い場所で、標高約354.2mである。一部に、当時のものと思われる石積が見られる。

ここには、この地所を所有されている鈴木家の江戸時代以降の墓地があるが、それに混じっていくつかの中世石造物がみられる。石造物には、五輪塔・宝篋印塔・石仏のほか、蔵骨器の蓋かと思われるような石材もある。場所としても、松月院跡に伴う墓域がここに存在していたと考えてよかろう。

さて、ここで見られる五輪塔・石仏には、次のような銘文の見られるものがある。

a　五輪塔（fig. 9－18)銘

天文廿年辛亥
（梵字（アー））龍機童女
□□□廿四日

b　五輪塔（fig.9－16)銘

天文廿二
（梵字（ア））宗□（治カ）
□月廿八日

c　石地蔵（ＰＬ.12参照）銘

恵性童女
天文廿三甲寅二月三日

いずれも天文年間で、天文20(1551)年以降のものである。この土地を所有されている鈴木喜三郎氏によると、これらの石造物は、全て松月院跡内から出てきたもので、他から持ち運んだものはないという。したがって、これらの石造物は、松月院跡に伴う遺物として考えるのが妥当である。

東堂跡

本堂跡から南東方向に、一連の平坦地がある。「東堂跡」と呼称されている場所である（以下、「東堂跡」と呼称)。標高約350.2mである。平坦部の南部には50～80cm程度の自然石が観察でき、それは中央にある小さな段の上に点々と連なっている。東堂跡の東部は急峻な斜面となっており、松月院築造時の削平によるものと考えられる。西側は崖となっているが、その際に当時のものと思われる小規模な石積が見られる。

外郭の石垣

本堂跡の南裾を区切る石積のさらに南側にも石垣がある。石垣の裾は、現在では本堂跡の平坦地から約５m下である。石垣は、現在では２ヶ所に認めることができるが、今世紀前半までは全体が一連につながっていた状態のまま保存されていたという。

このうち最も残りのよい部分は、現存高約3.9mで、裾部約69°、上部約88°という急峻な角度で積み上げられている。本堂跡東の石垣と同様、自然の河原石で積み上げられているもので、大きなものでは幅が２mにも達するものがある。

構成

以上、現在の松月院で観察される状況を見てきた。丘陵を削平して造成する。内部は本堂跡・東堂跡・墓域があり、石垣を伴っている。さらに外郭を石垣で取り巻いているという状況が観察された。今残されているものでもそうであるが、創建当時はおそらく、見る人を圧倒するほどの迫力があったものと考えられる。

今回の調査地は、本堂跡のすぐ西側にあたる部分である。

註

(1)伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1993)

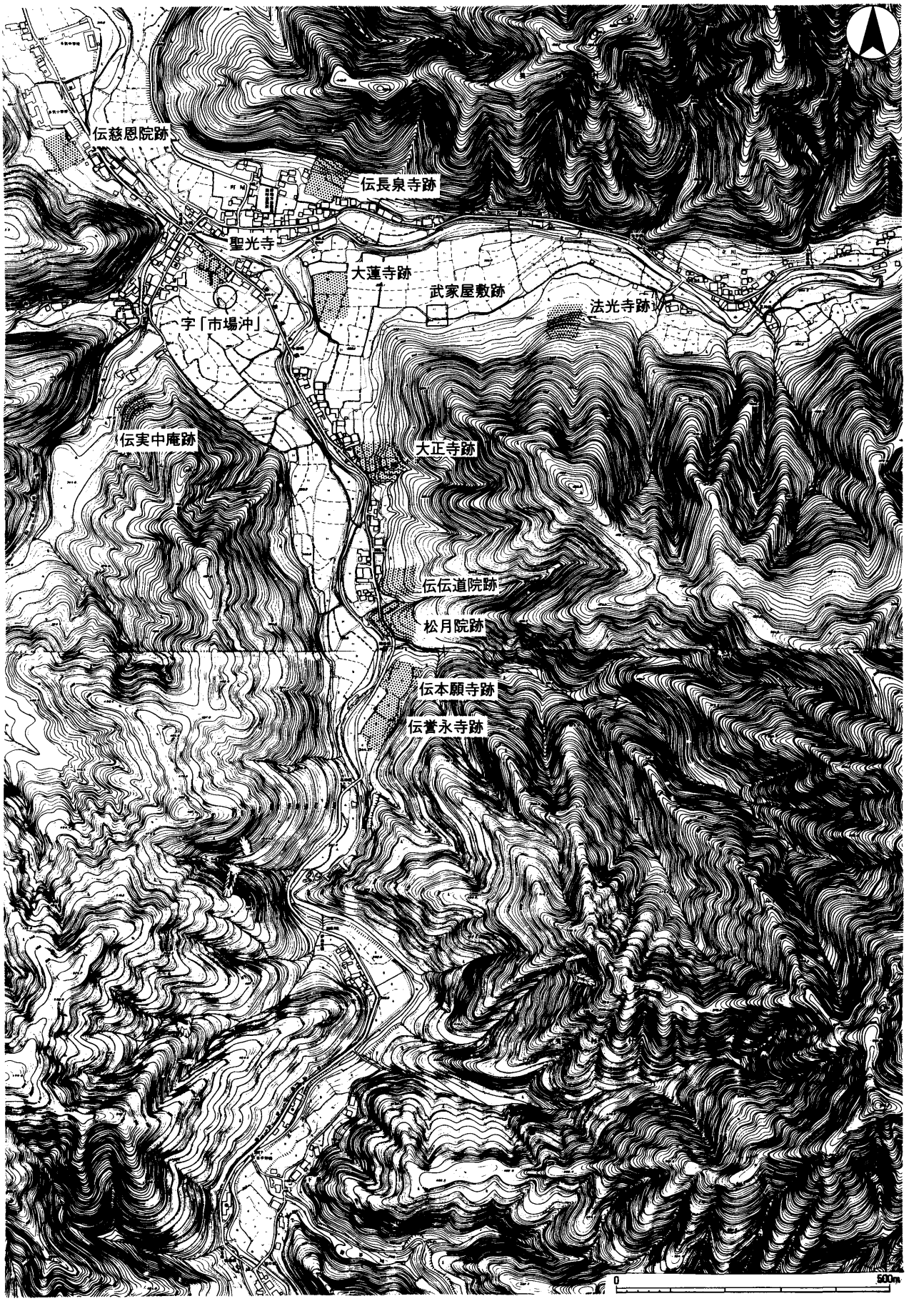


fig. 2　遺跡周辺地形図（1：10,000）　※「武家屋敷」は確認されているものに限る。

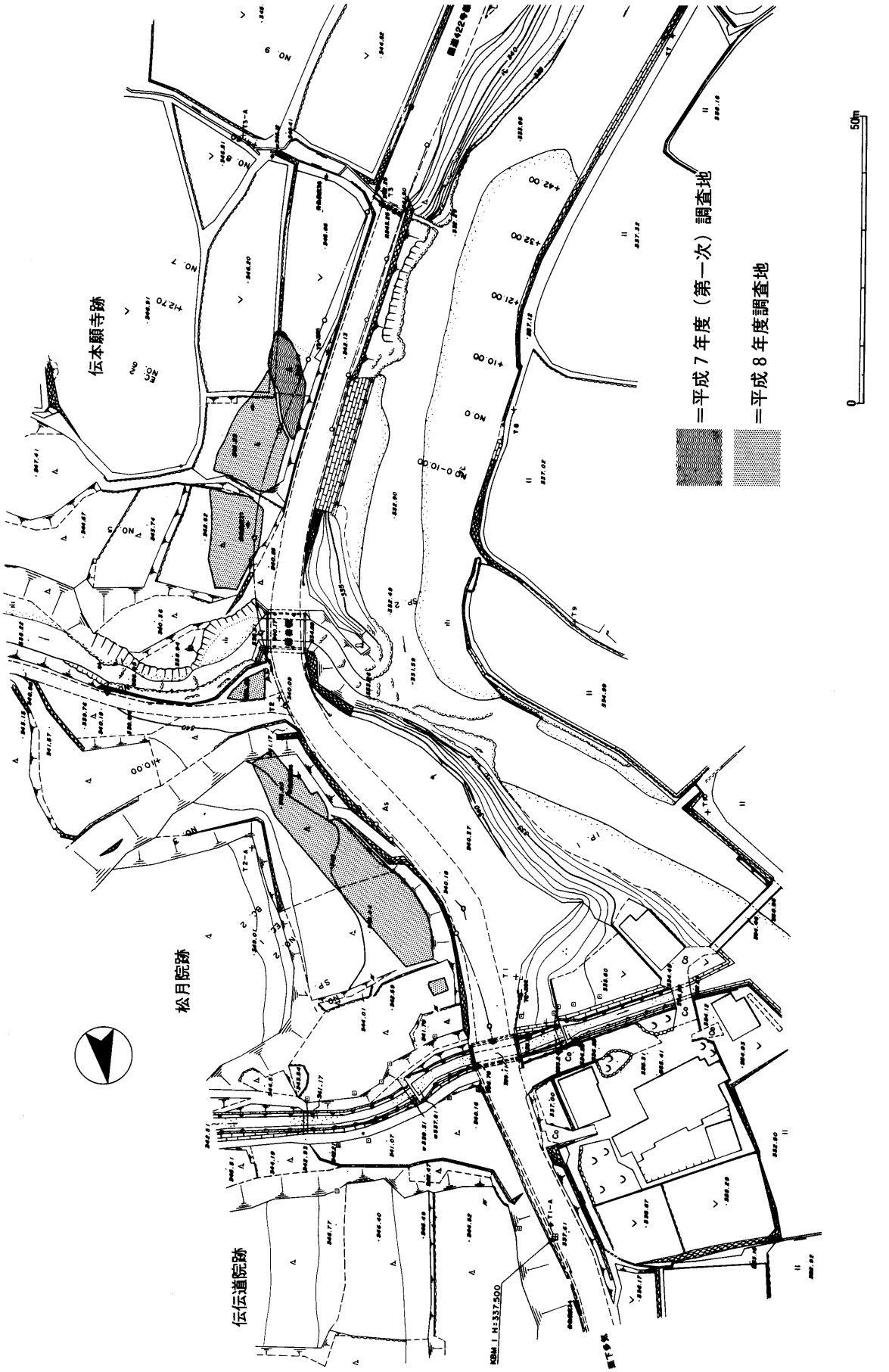


fig. 3　調査区周辺地形図（１：1,000）

Ⅲ　調査の成果－層位と遺構－

1　調査区の地形と基本層位

調査区は、調査前の標高で約345mの丘陵突端部に位置する。

a　松月院跡の層位

松月院跡・伝本願寺跡ともに、層位的な差異はほとんどない。遺構基盤は、黄褐色系土で、内部には媒乱した片岩あるいは花崗岩を含む。松月院跡では、遺構基盤層から地表までの間におよそ30cmほどの灰褐色系土が堆積する。これは、近世～近代の遺物を包含するもので、開墾に伴う表土と表現できるものである。

b　伝本願寺跡の層位

伝本願寺跡の層位は、第１次調査区のものと大きくは変わらない。ただし、今回の調査区は、第１次調査区ほど中世遺構面上への堆積土（耕作地造成に伴う置土）が無い場所で、表土直下にて原則的には遺構が検出できた。

なお、伝本願寺跡調査区は、上下２段の平坦地に大きく分けられる。上段部は第１次調査区に連続するものであるが、厳密に第１次調査区と同一遺構面として把握できるのは南端の三角形状部分のみで、それ以北は20cmほど下がっており、後世に削平されたものと考えられる。上下段ともに、北端部は落ち込み状になり、この平坦地が過去に人為的に造成されたものであることを示している。

2　検出した遺構

a　松月院跡の遺構

土坑ＳＫ１　調査区中央部やや南寄りのｃ12グリットで検出した遺構である。直径約1.6m、深さ約0.4mの円形の土坑の西に、浅い落ち込みが取り付く。江戸時代後半頃の土器類が少量出土している。

溝ＳＤ２・３　調査区中央部のｃ10グリット付近で検出した遺構である。それぞれ幅約0.6m、深さ約0.2mで、両者は直交関係にある。埋土中に、近代の土器や散弾銃の薬莢があるため、新しい時期の遺構である。

土坑ＳＫ４　溝ＳＤ２・３に囲まれた土坑である。出土土器は小片しかないが、ＳＤ２・３と同じような時期のものであろう。

ピット　ｄ11グリットpit１からは、江戸時代のものと思われる国産磁器椀が出土している。この付近にあるピットは、これと同様な埋土であり、江戸時代のものであろう。

石列ＳＡ５　ｂ・ｃ13グリットで確認できた遺構である。幅約0.2m程度の平坦な石が1.8m間隔で３個確認できた。しかし、ピットなどの掘り込みは確認できなかった。所属時期は不明である。

b　伝本願寺跡の遺構

遺構番号１～７までは、第１次調査区に相当するため、今回の調査区で新たに確認された遺構はそれ以降の番号を付加する。なお、ＳＤ５については、今回の調査区からもその延長部分が確認されている。

土坑ＳＫ８　ｃ５グリットで検出した遺構である。直径約1.5m、深さ約0.7mの円形の土坑周囲に厚さ約10cmの明黄色粘土を貼っている。埋土上層には焼土が見られる。埋土中からは近代の遺物が出土している。

土坑ＳＫ９　ｂ９グリットで検出した遺構である。埋土中から、近世の遺物が出土している。

石組ＳＫ10（fig. 8）　ｂ４グリットで検出した遺構である。長辺約1.4m、短辺約1.0mの長方形の土坑に、内法で長辺約0.8m、短辺約0.6mの石組を作る。埋土は焼土が充満しており、石組の内側にも被熱痕が一部見られた。かつて当地の民家ではよく見られた「ダンロ」ではないかと考えられる。出土遺物がなく、時期はよく分からないが、おそらく近代のものであろう。

石列ＳＺ11（fig. 7）　ｂ７グリットで検出した遺構である。延長3.3m分が検出された。40cm内外の石を配し、隙間に10cm程度の小石を詰めていることから、石垣（石積）であった可能性がある。西側に面を合わせている。底面は平坦にされておらず、一見階段状をなすが、配石の状況から階段とは考えにくい。

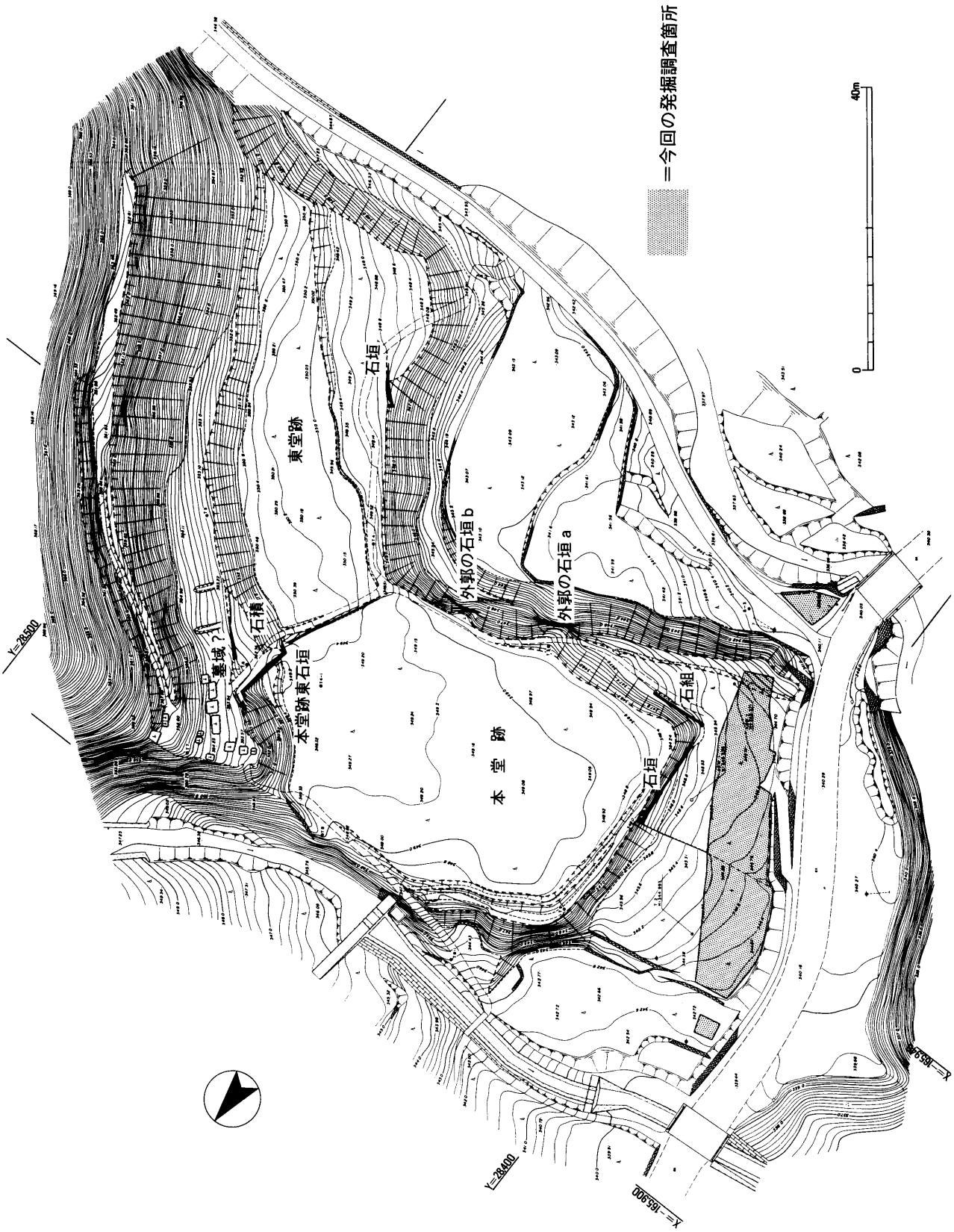


fig. 4　松月院跡と調査区の位置（1：800）

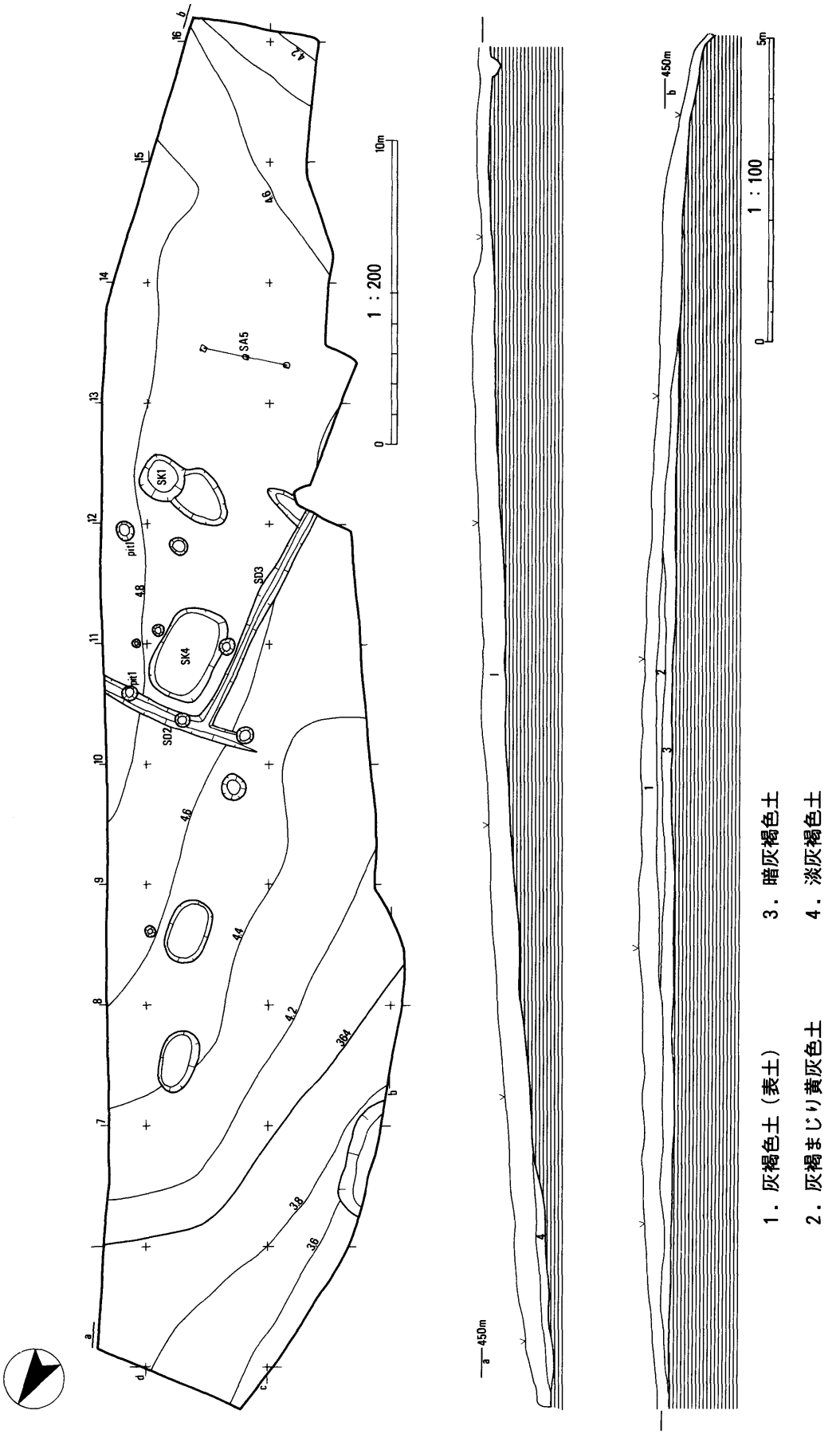


fig. 5　松月院跡調査区平面・土層断面図

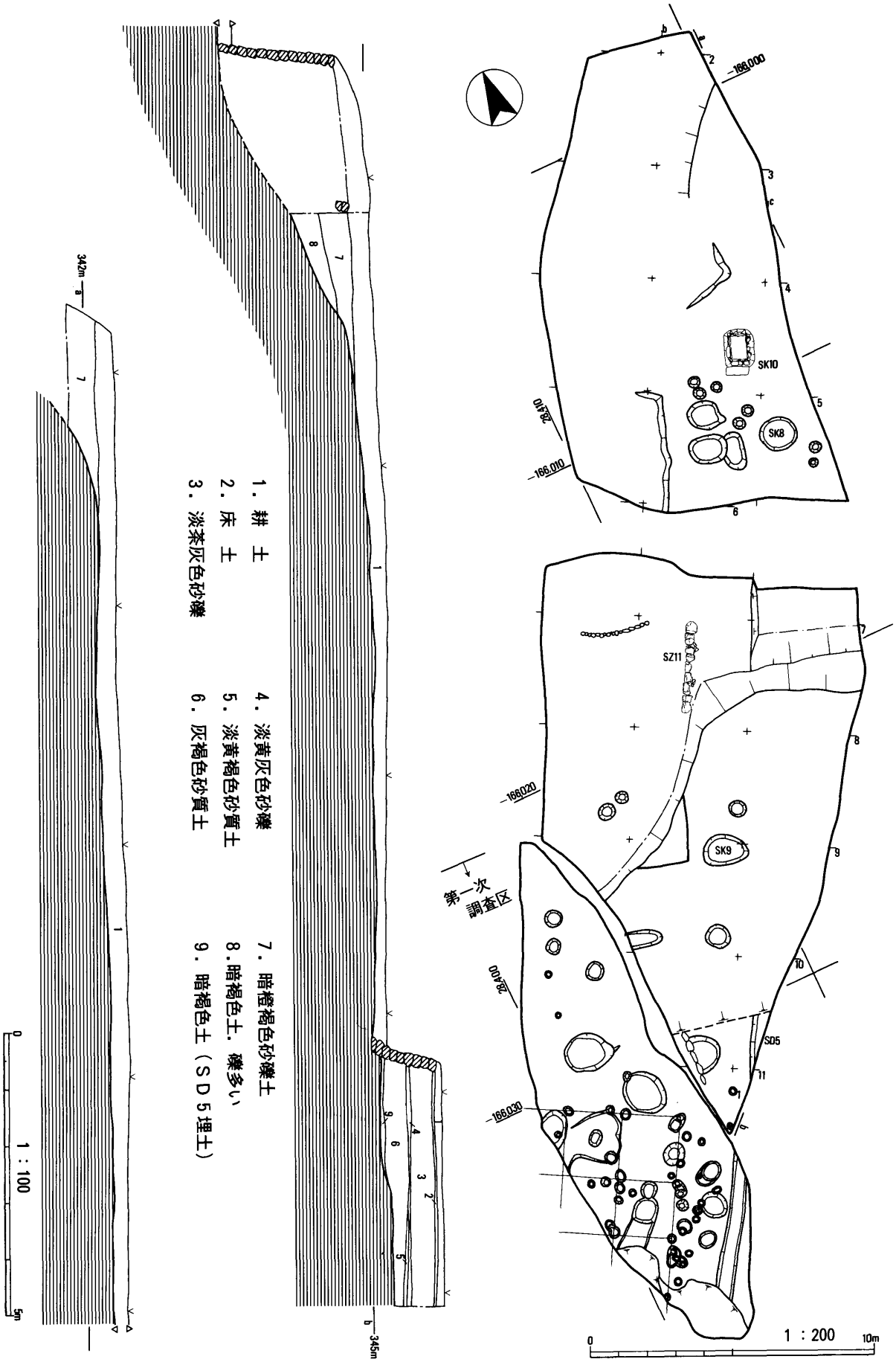


fig. 6　伝本願寺跡調査区平面・土層断面図

この遺構に伴う出土遺物はないが、北側にある落ち込みの埋土中から15世紀後半以降の土器が見られるため、この時期以降のものと推測される。

落ち込み　先述したように、調査区上下段のそれぞれ北端部は、落ち込み状を呈する。これは、本来の自然地形と考えられる。上段の落ち込みからは15世紀後半以降の土師器や北宋銭が、下段の落ち込みからは近代の土器類が出土している。これが、整地された時期を示す手がかりと考えられる。

ピット　上段調査区の南端にあたる c 11pit 1からは、13世紀末から14世紀前半頃と考えられる土器類が出土している。これは、第1次調査区で確認されたピット群と一連のものと考えられる。

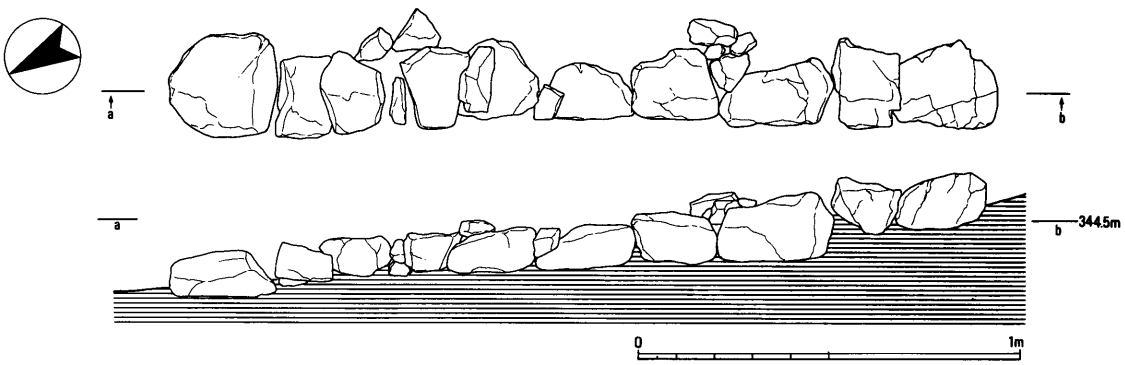


fig. 7　石列ＳＺ11平面・立面図（１：20）

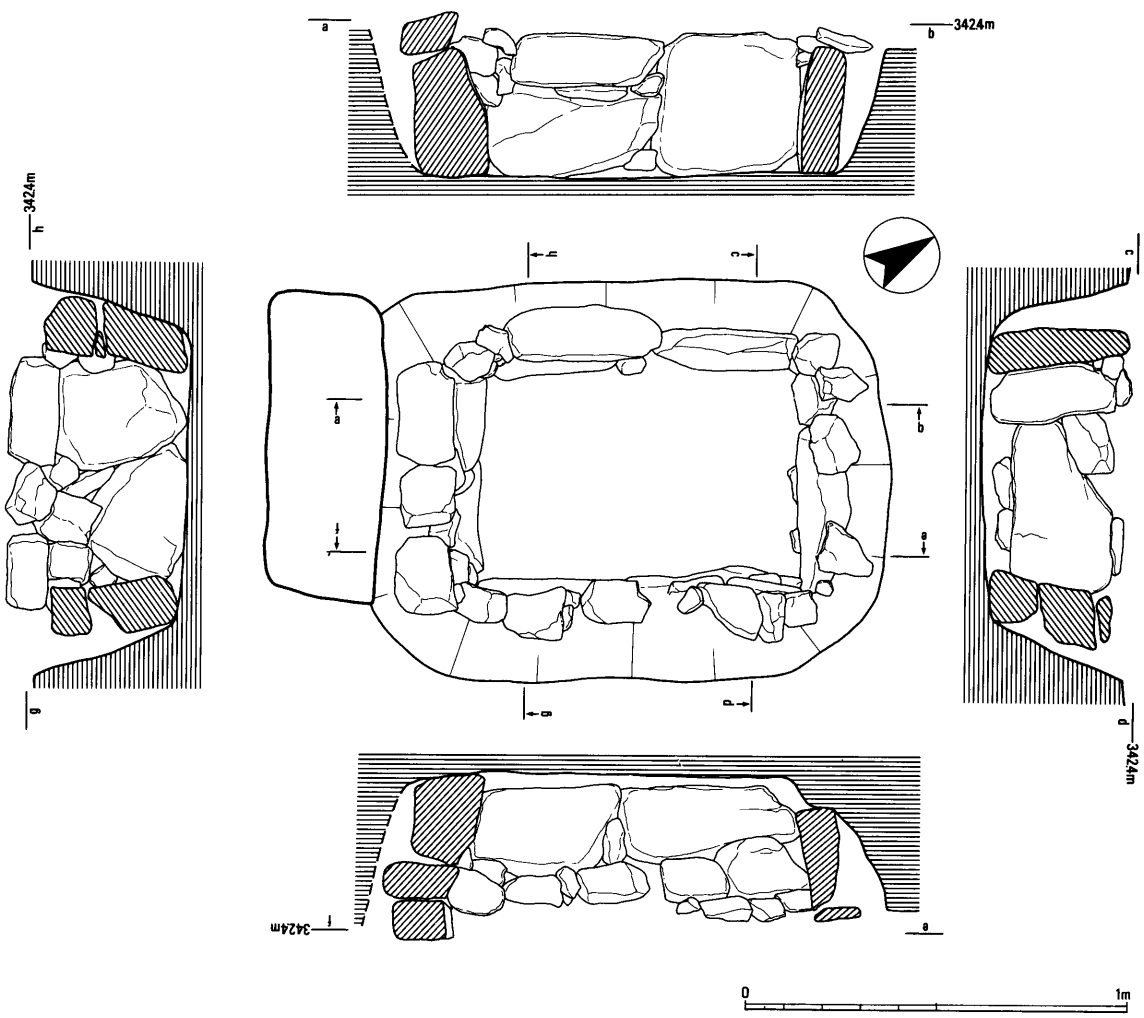


fig. 8　石組ＳＫ10平面・立面図（１：20）

Ⅳ　調査の成果－出土した遺物－

松月院跡・伝本願寺跡を通じて、今回の調査区内から出土した遺物は、整理箱に換算して２箱と少ない。そのほとんどは近代以降の土器類である。

以下、主な出土遺物について記述する。詳細は、遺物観察表（tab.１）も参照されたい。

１　松月院跡の遺物

松月院跡から出土した遺物で、実測に耐えうるものは極めて少ない。図示したもの以外では、縄文時代以前のチャート剥片と、13世紀代と思われる龍泉窯系の青磁椀片があり、その他は近世～近代のものである。

１は土師器鍋か焙烙の破片を円形に加工したもので、中央には穴が開けられている。近世には「ハトメ銭」という銭貨を模したものが存在するが、そのようなものであろうか。

２は国産陶磁器の椀で、肥前産のものかと思われる。18世紀代のものであろうか。

２　伝本願寺跡の遺物

中世以前の遺物

３は土師器の甕である。口縁部が内面に若干肥厚するものである。平安時代後期頃のものであろう。

中世の遺物

４・５はｃ11pit１から出土している。４は陶器椀（山茶椀）で、瀬戸産と思われる。藤澤良祐氏の編年による第７型式に相当する。５は土師器皿で、岩出遺跡群における分類のｂ期の前半に相当する。13世紀後葉から14世紀前半にかけてのものである。

６～８は中世後期に相当する時期の土師器類である。６はいわゆる京都系の小皿、７は南伊勢系Ｄ系統皿、８は南伊勢系の鍋で第４段階ｂ型式に相当する。概ね15世紀後半頃のものである。

９は明代の染付椀である。内面上部には四方襷文が、外面にも何らかの文様が施されている。10は青磁の椀で、明代のものか。内外面ともに厚く釉が施されている。内面見込みには何かの文様があるが、釉が厚くてよく分からない。

11は銭貨で、熙寧元寶（北宋；初鋳は1068年）である。

近世以降の遺物

12は陶器の小皿である。調査区下段の北部落ち込みから出土した。13は陶器の擂鉢である。瀬戸産のもので、藤澤良祐氏の編年によれば19世紀前半頃のものである。

14はＳＫ８から出土したものである。ニッケル製かと思われ、瓶か何かの蓋と考えられる。外面に「合繊テリアカ」、内面に「近江製剤株式會社」とある。

３　松月院跡の中世石造物

発掘調査で出土したものではないが、関連する遺物として、松月院本堂跡東のテラス上にある石造物を報告する。15～17は五輪塔、18は宝篋印塔、19は石地蔵である。

15は一石五輪塔である。現存高27.4cm、地輪の幅10.8cmと小形のものである。火成岩製である。

16は組合式の五輪塔で、火・水・地輪部のみ残る。現存高33.0cm、地輪幅16.0cmである。水輪には「バ」、地輪には「ア」の梵字が刻まれる。地輪には、「天文廿三」（1554年）ほかの銘が見られ、第Ⅱ章で触れている。

17は組合式の五輪塔で、空・風・火、水・地の各輪がそれぞれ一体で作製され、組み合わせられている。現存高49.0cm、火輪幅17.3cm、地輪幅16.8cmである。砂岩質の石材である。今回の調査区付近で畑の耕作中に出土したものという。

18は五輪塔の地輪と思われる。意図的かとも思われる破損状況を示す。南面部分に「天文廿年」（1551年）ほかの銘があり、第Ⅱ章で触れた。

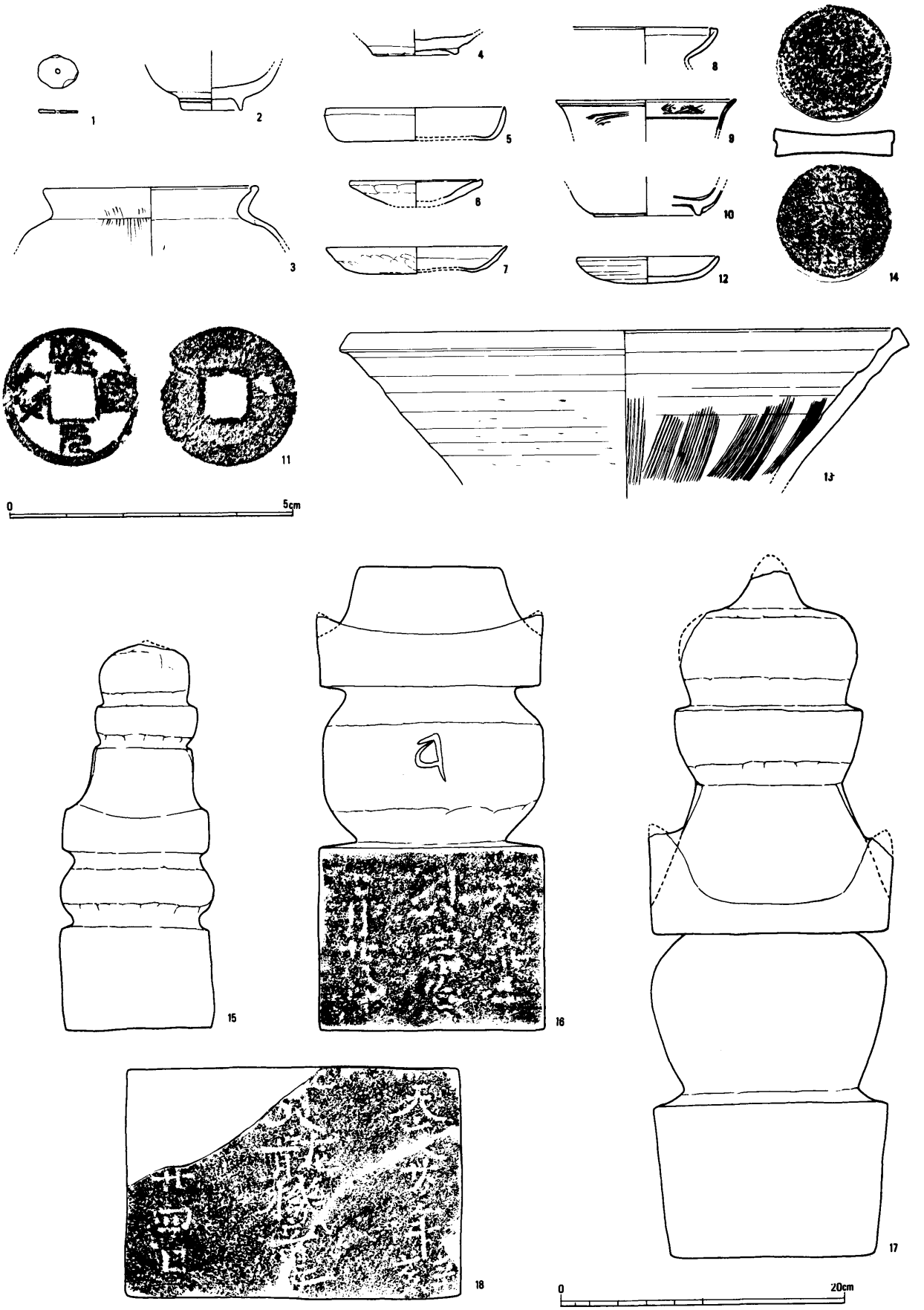


fig. 9　出土遺物ほか実測図（11、14は原寸、他は１：４）

番号	実測番号	種別・器種	地　区	小地区	遺溝など	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土・素材	色　調	残存度	特　記　事　項
1	2－8	加工円盤	松月院	d10	pit 1	長さ 2.9	土師器鍋体部片を転用	密	暗黄橙	完存	中央に穿孔
2	1－4	陶磁器　椀	松月院	d11	pit 1	高台 4.4	施釉・染付	密	釉；明青灰	高台完存	国産磁器
3	2－4	土師器　甕	伝本願寺	a 5	黒　褐　土	口縁15.2	トコナデ、ナデ、ハケメ	密	淡黄橙	口縁1／10	
4	1－3	陶器　椀	伝本願寺	c11	pit 1	高台 6.2	ロクロナデ、糸切り	密	灰白	高台完存	山茶椀　瀬戸
5	1－6	土師器　皿	伝本願寺	c11	pit 1	口縁13.0	ナデ・ヨコナデ	密	灰白	口縁1／5	南伊勢系
6	2－3	土師器　小皿	伝本願寺	c11	暗　褐　土	口縁 9.4	ナデ・オサエ、ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1／7	京都系
7	2－1	土師器　皿	伝本願寺	a 7	近世盛土	口縁12.8	ナデ・オサエ、ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1／5	南伊勢系
8	2－2	土師器　鍋	伝本願寺	c 7	黒　褐　土	口縁　－	ヨコナデ	密	暗黄橙	口縁部片	南伊勢系　外面に煤
9	2－3	磁器　椀	伝本願寺	a 7	近世盛土	口縁13.0	施釉・染付	密	釉；青灰	口縁1／8	明治染付
10	1－5	磁器　椀	伝本願寺	b 4	黒　褐　土	高台 7.6	施釉	密	釉；明緑	高台1／8	見込みに文様あるが、釉厚くて不明
11	2－7	銭貨	伝本願寺	c 5	落ち込み			銅合金			熙寧元寶
12	1－2	陶器　小皿	伝本願寺	b 2	褐　色　土	口縁10.2	ロクロナデ・ロクロケズリ	密	釉；暗赤褐	ほぼ完存	内面に重ね焼き痕
13	1－1	陶器　擂鉢	伝本願寺		表　　土	口縁40.6	ロクロナデ・ロクロケズリ・擂目、施釉	密	釉；暗赤褐	口縁1／6	
14	2－6	蓋	伝本願寺	c 5	S K 8	直径 2.1		ニッケル？		完存	上面「テリアカ」 下面「近製剤株式会社」
15		五輪塔	松月院		本堂跡東現存	残高27.4	一石五輪塔	大洞石？		ほぼ完存	一石五輪塔
16		五輪塔	松月院		本堂跡東現存	残高33.0	火・水・地輪を一石にて作製	砂岩		図示部分完存	外面四方に梵字 東面に「天文廿三年」ほかの銘文
17		五輪塔	松月院		本堂跡東現存	残高49.1	空・風・火輪と水・地輪をそれぞれ1石にて作成	砂岩		ほぼ完存	
18		五輪塔	松月院		本堂跡東現存	残高16.0	組合式五輪塔	砂岩		4／5	両面　外面四方に梵字 東面に「天文廿三年」ほかの銘文

tab. 1　出土遺物観察表

V　調査のまとめと検討

今回の発掘調査は、道路拡幅幅を調査した程度の狭い面積であった。そして、これまで多気の地で行ってきた一連の緊急調査のなかでも、遺構・遺物ともに最も希薄な調査でもあった。

しかし、希薄であること＝価値がない、というわけではない。希薄であることによって生じたいくつかの問題点もある。ここでは、今回の調査成果から考えられるいくつかのことについて延べ、まとめに代えたい。

1　松月院跡について

今回の調査では、本堂跡の西に接続する平坦部を調査した。その結果、近世～近代にかけての遺構・遺物は存在したものの、中世に遡る遺構・遺物は極めて希薄であった。この平坦地には、中世の段階には何らの遺構も構築されていなかったと評価できる調査結果であった。

松月院跡に残存している大規模な石垣の構築時期についての情報を得ることはできなかったわけであるが、一方では新たな事実も判明したといえる。つまり、松月院跡には、第章でも触れたように、大規模な石垣が造成されており、本堂跡を中心に、壮大な遺構が残存している可能性は極めて高い。それにもかかわらず、今回の調査区からはその兆候を示すようなものは一切確認されなかったという事実は重要である。

おそらく、今回の調査区である本堂跡西の平坦地には、当時から空間地として存在していたと考えることができる。では、このような場所は、一体どのような機能が考えられるのであろうか。

考えられるのは、本堂の前面景観を重視し、地形的にも開ける西側への建物配置を差し控えた、ということである。福井県・一乗谷朝倉氏遺跡第40次調査で確認された寺院跡と考えられる遺構[1]についても、本堂跡と推定されるＳＢ1556の前面には建物が認められない。現在見られる寺院建築でも、山門以

外の建物が本堂の前面に建てられる例は少なく、このような意識が働いているものと考えることができる。

つぎに、松月院跡から確認された中世の遺物は、明確には中世前期に相当する青磁片１点のみである、ということに注意したい。南隣する伝本願寺跡からは、平成７年度の調査で14世紀頃の遺構が存在していることから、多気の盆地のなかでも最奥部に相当する当地に、北畠氏入部当初から遺跡が広がっていたことは確実である。このことからすれば、松月院跡付近にも何らかの人の手が加えられていても不思議ではない。

しかし、松月院跡の調査区については、松月院造成時に大きく地形が改変されていると見なければならない。このことを踏まえ、なおかつ中世前期の遺物が存在したことを考慮すれば、松月院造成という大土木工事によって、中世前期に相当する時期の遺構が削平されてしまった可能性を考えることができる。

2　伝本願寺跡について

伝本願寺跡については、平成７年度の第１次調査に引き続き、その北側を調査することとなった。しかし、第１次調査区と同じ遺構検出面であったのは調査区南端の一角のみであり、大部分は20cm以上低い検出面であった。この低い検出面から確認された遺構には近世から近代にかけてのものが見られることから、中世の遺構はこの時期にかなり削平を受けているものと考えられる。

土層図を見ても、調査区の中央には北に向かっての大きな落ち込みがあり、また、調査区北端にも同様な落ち込みが認められる。おそらく、今回の調査区で確認した石列ＳＺ11以北は、石列ＳＺ11の構築以前には、自然な傾斜が見られたところであったものと考えられる。

石列ＳＺ11と、この付近に見られる落ち込みからは、15世紀後半頃の遺物が若干見られた。石列ＳＺ11の構築時期をおおよそ示すものと考えられる。このことから、石列ＳＺ11の構築の段階に、一定の整地がなされたものと考えられる。石列ＳＺ11は西側に面を揃えているので、これに伴う遺構は石列の東側に想定することができる。しかし、これが伝承にある本願寺に関連するのかどうかは分からない。

なお、調査区内からは、平安時代後期頃の土師器甕が出土している。この周辺に当該時期の遺跡が広がっている可能性がある。

以上、今回の調査成果をもとに、いくつかの指摘を行った。松月院跡については、第Ⅱ章でも触れたように、大規模な石垣が良好に残っている。今後、多気遺跡群のなかでも最も迫力のあるこの遺跡を保存・整備する方向を検討していかなければならない。

註

(1) 福井県立朝倉氏遺跡資料館編（『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡』 1982）

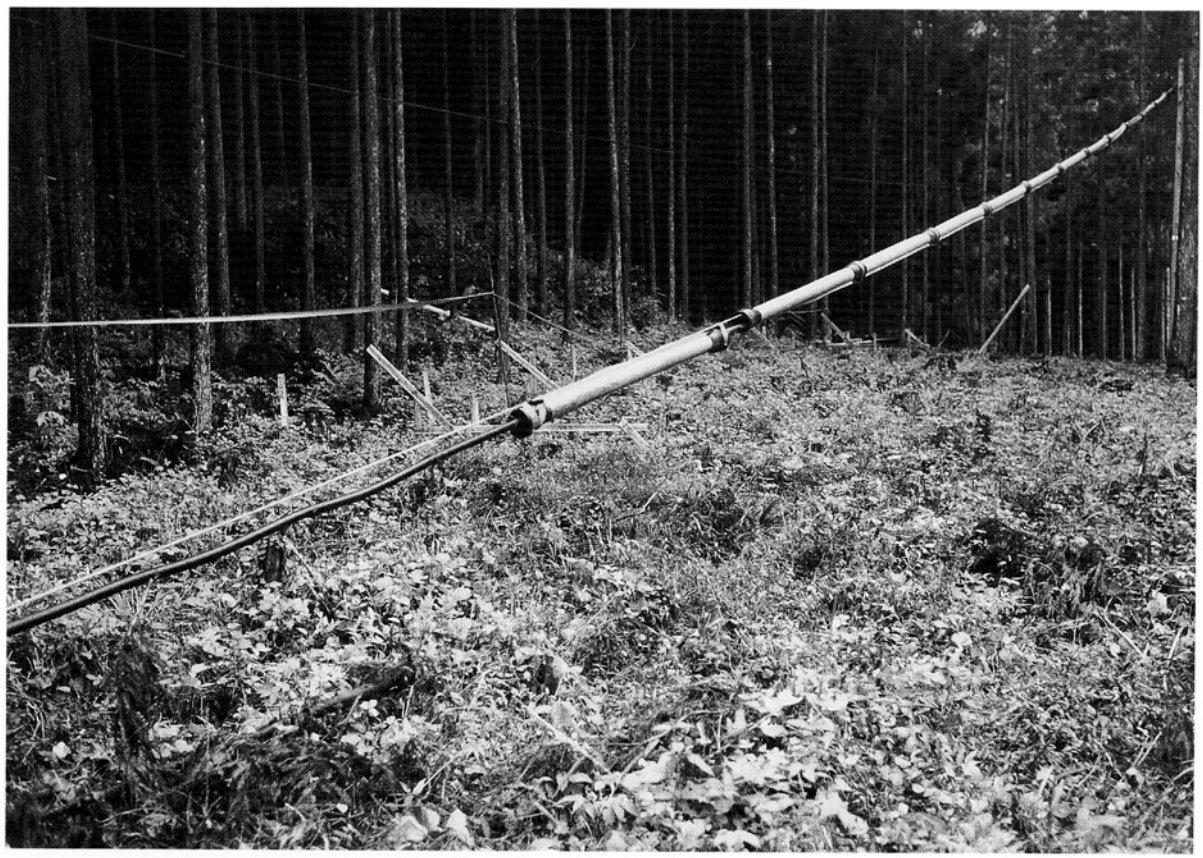
報告書抄録

ふりがな	しょうげついんあと・でんほんがんじあと
書名	松月院跡・伝本願寺跡
副書名	多気遺跡群発掘調査報告Ⅳ
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	151
編著者名	伊藤裕偉
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 05965－2－1732
発行年月日	西暦　1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
松月院跡 伝本願寺跡	三重県一志郡 美杉村上多気 字小津	244066	26-38 26-41	34° 30′ 08″	136° 18′ 35″	19960829～ 19961016	740	平成8年度国道422号線県単道路改良工事に伴う緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
松月院跡	寺院跡	戦国			大規模な石垣残存
伝本願寺跡	寺院跡？ 集落	戦国	石列	土師器・陶器	
					松月院跡の石垣実測図と地形測量図を添付

調査前（南から）



調査前（北から　後方は本堂跡の土壇）

調査風景

本堂跡南西隅付近（西から）

松月院跡調査区(3)

調査後（南から）

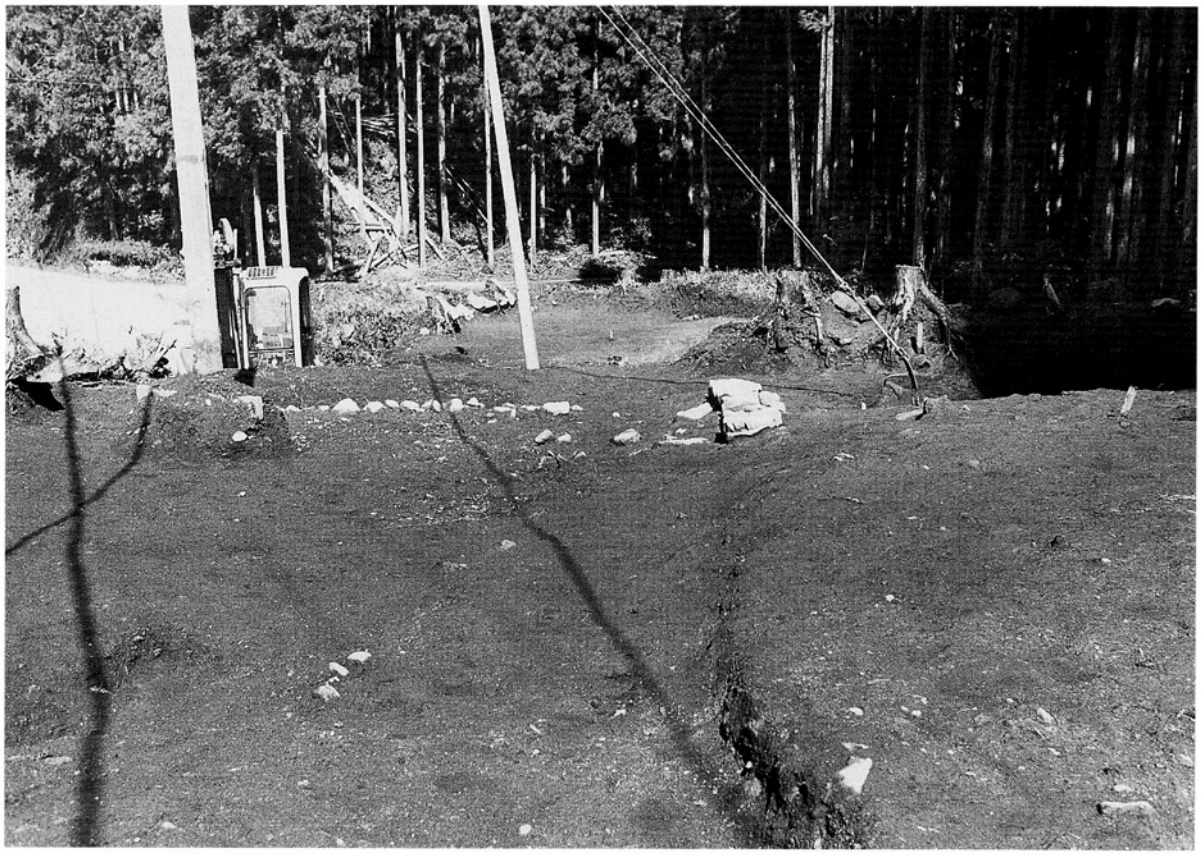
調査後（北から）

伝本願寺跡調査区(1)

調査前（北から）

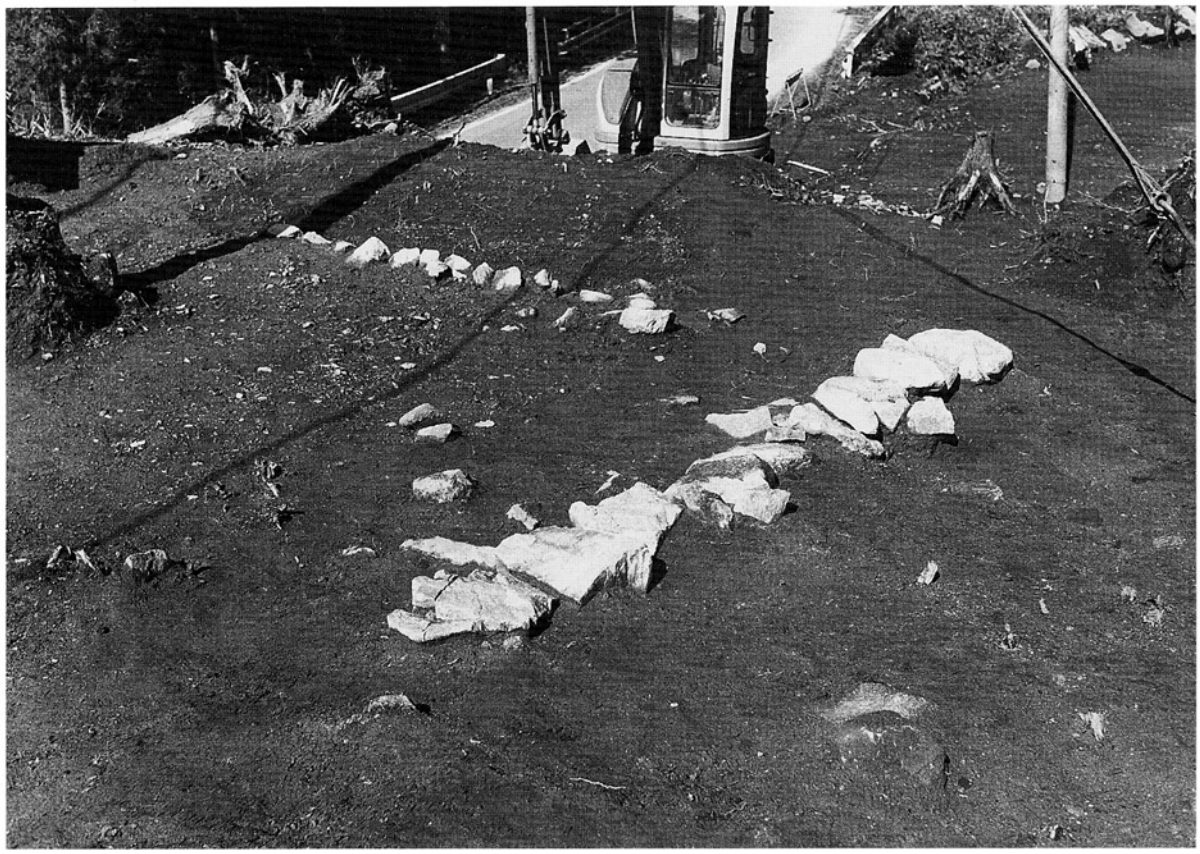
調査風景

伝本願寺跡調査区(2)

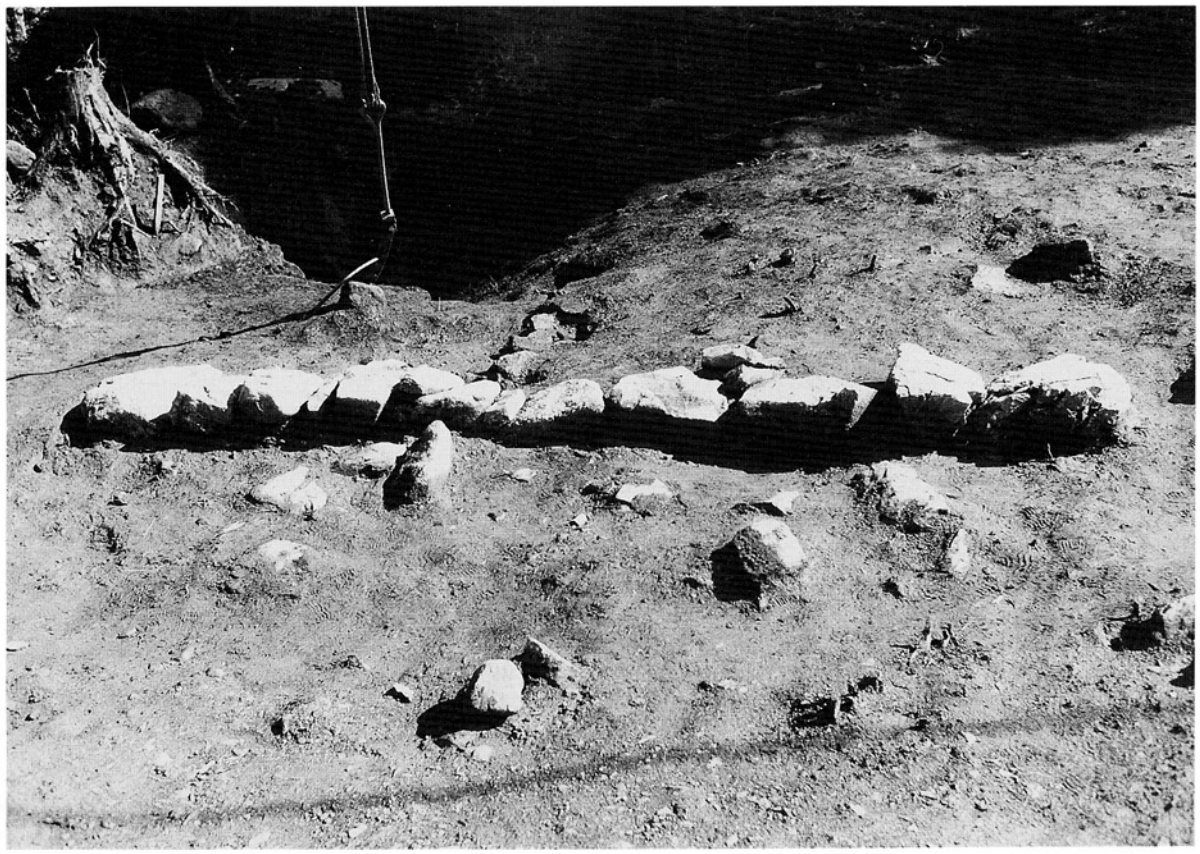


調査後（南から）

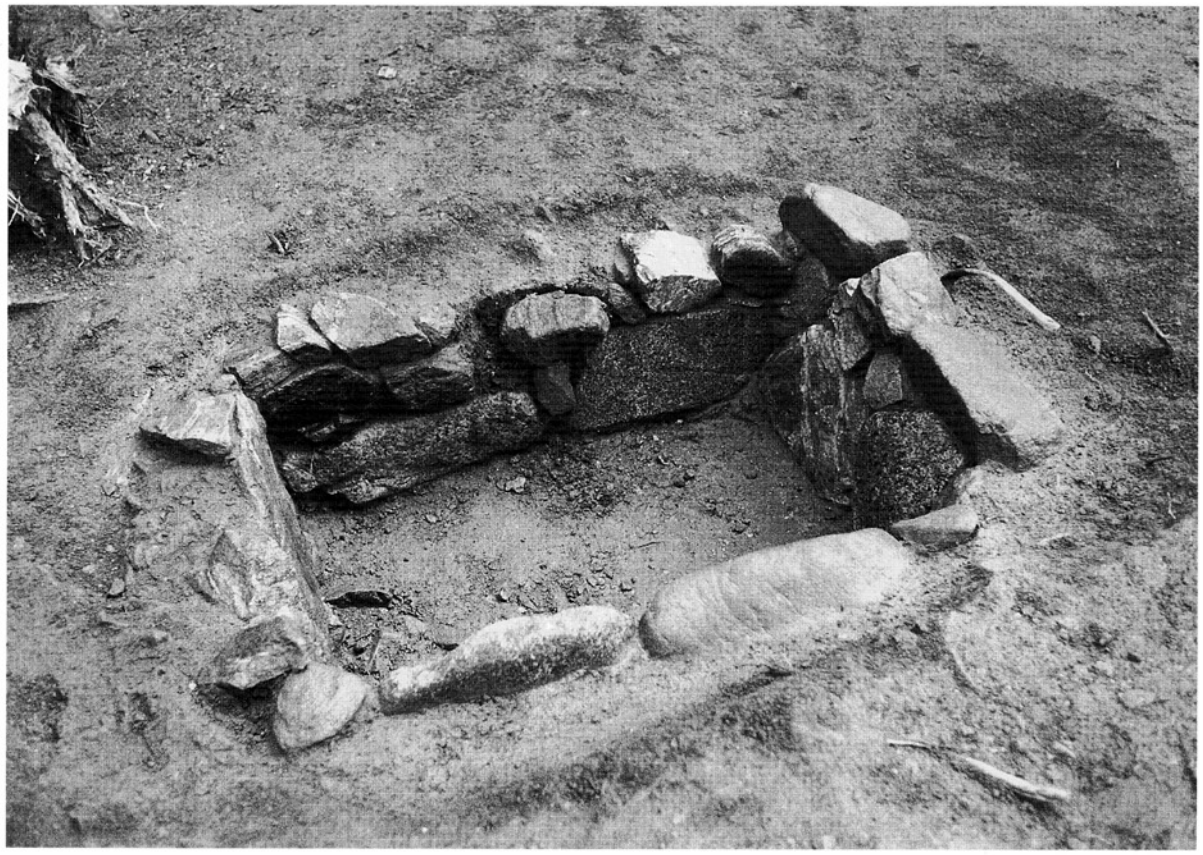
調査後（北から）



石列ＳＺ11付近（南から）



石列ＳＺ11（西から）



石組ＳＫ10（西から）

土坑ＳＫ８（北から）

松月院跡(1)

本堂跡東の石垣（西から）

本堂跡東の石垣（西から）

本堂跡東の石垣・角の石積（南西から）

本堂跡東の石垣（西から）

本堂跡南面の石垣（西から）

本堂跡南面の石垣（東から）

外郭の石垣ａ（南から）

外郭の石垣ａ、傾斜の状況(東から)

外郭の石垣ｂ（南から）

本堂跡東にある石仏（天文23年銘）

本堂跡東にある五輪塔（fig. 9 —15）

本堂跡東にある五輪塔（fig. 9 —17）

本堂跡東にある五輪塔（天文22年銘）（fig. 6 ―16）

本堂跡東にある五輪塔（天文20年銘）（fig. 9 ―18）

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　151

多気遺跡群発掘調査報告Ⅳ

松月院跡・伝本願寺跡

1997年3月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

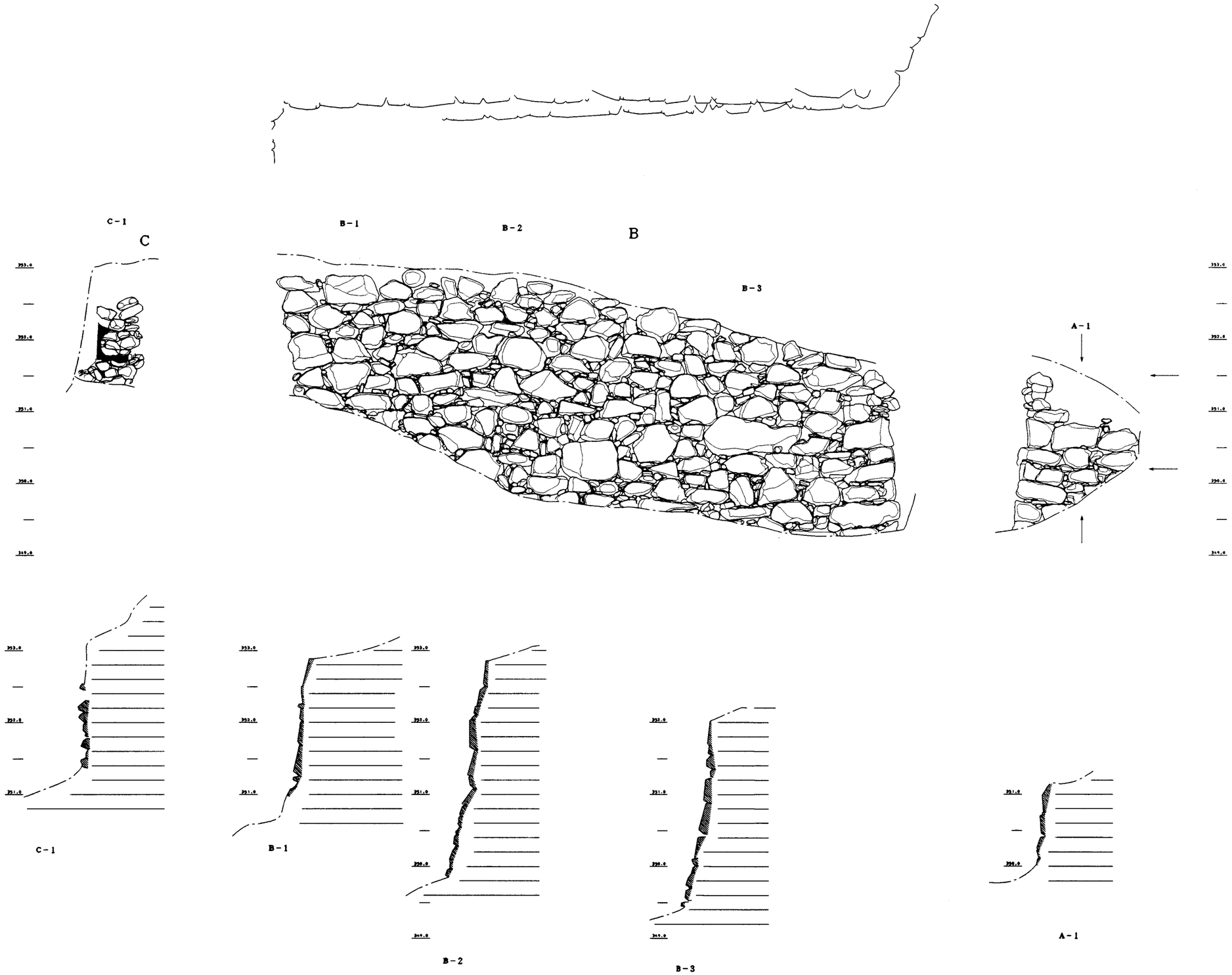
印刷　光出版印刷株式会社

松月院跡地形測量図 S=1:400

一志郡美杉村上多気地内

株式会社 イビソク調整

三重県埋蔵文化財センター



C B A

松月院跡

本堂跡東石垣

立面図

S=1:50

SYSTEM	IBISOKU 3D-Digitize System
DIGITIZE	1996.09.
EDIT	1996.10.

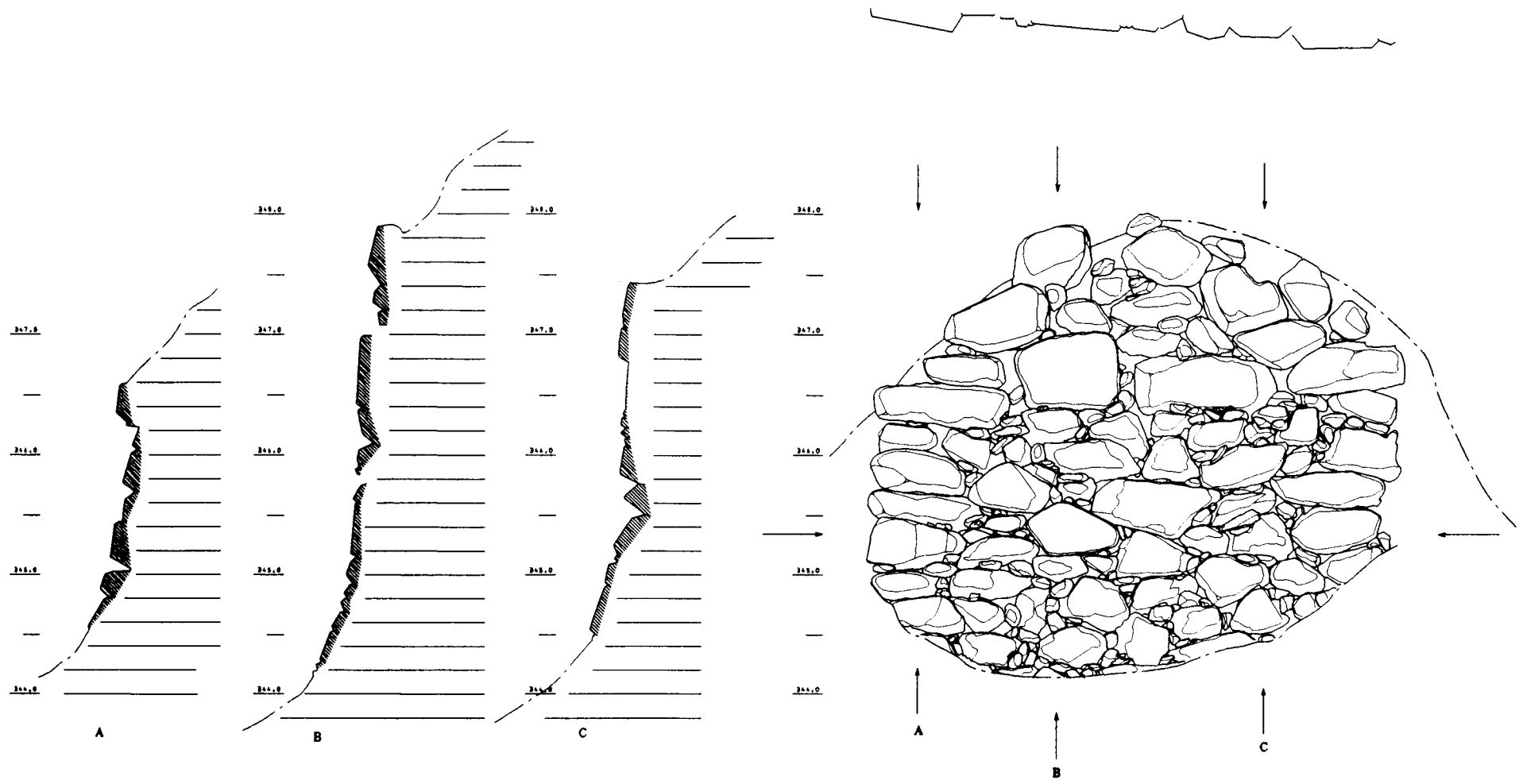
株式会社イビソク調整

三重県埋蔵文化財センター

松月院跡

外郭石垣　A

立面図



S＝1：50

SYSTEM	IBISOKU 3D-Digitize System
DIGITIZE	1996.09.
EDIT	1996.10.

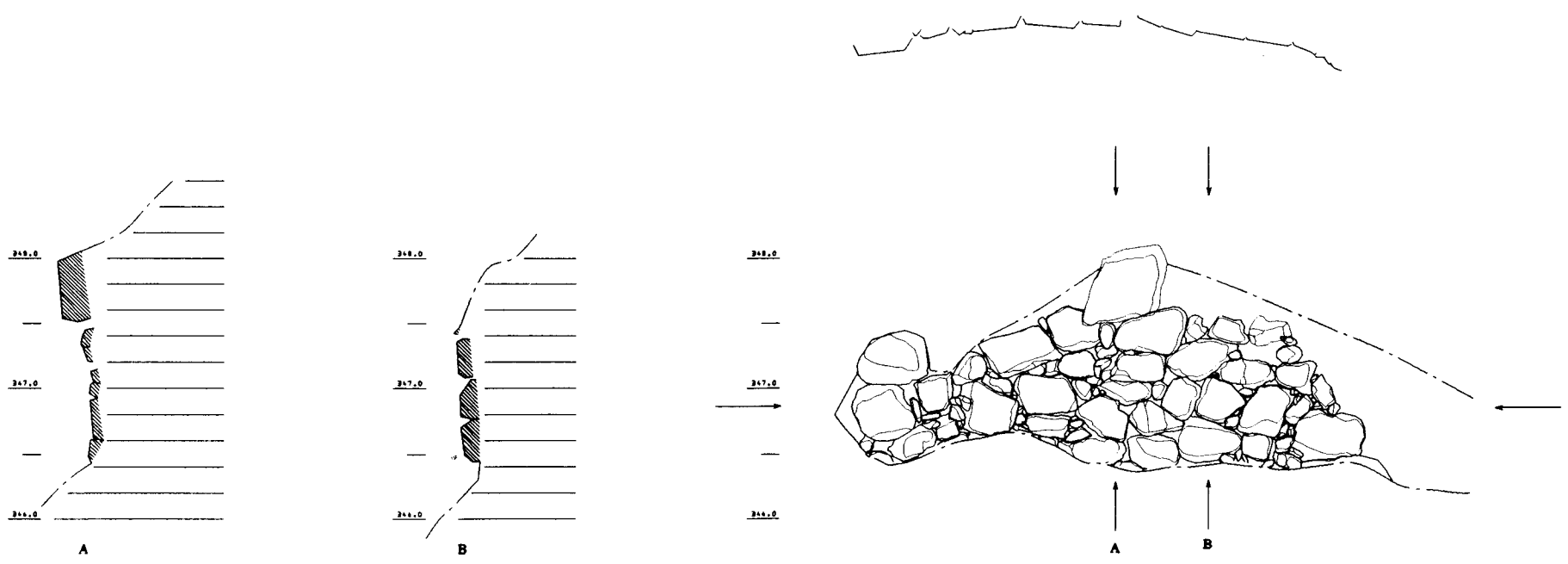
株式会社イビソク調査

三重県埋蔵文化財センター

松月院跡

外郭石垣　B

立面図



S＝1：50

SYSTEM	IBISOKU 3D-Digitize System
DIGITIZE	1996.09.
EDIT	1996.10.

株式会社イビソク調査

三重県埋蔵文化財センター